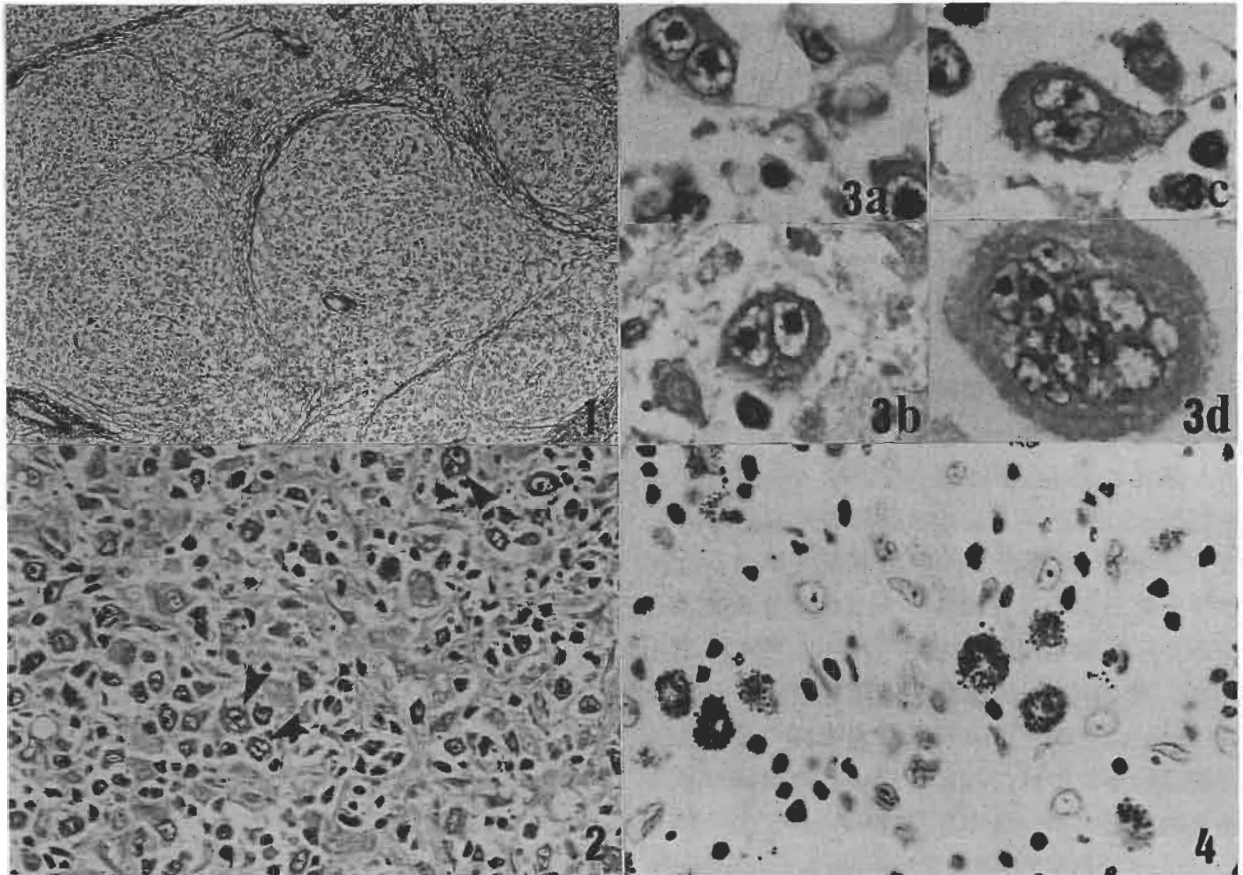


犬の肺

摂南大学薬物安全科学研究所出題 第33回獣医病理学研修会標本No.601



動物：犬，シェルティー系雑，雄，3歳。

臨床：下痢と嘔吐の症状を示し，頸部及び肩前部に鶏卵大の腫瘤を認めたとの稟告で某動物病院に来院した。初診時に頸部リンパ節の腫大，腹腔内の腫瘤を触知。X線検査において腹腔内に腫瘤を確認した。血液検査では，RBC;560万，WBC;34100，Ht;43%，Neut.;74%，Ly.;24%（うち異型細胞7%）。COAPプロトコールによる治療を初めたが，10日間の投与を終えたところで死亡した。

剖検所見：浅頸リンパ節・気管気管支リンパ節・脾十二指腸リンパ節・腸間膜リンパ節及び胸腺の著しい腫大並びに肝臓・脾臓・腎臓及び肺における限界明瞭な大小腫瘤形成が認められ，断面はいずれも白色均質であったとのこと。

組織所見：限界明瞭な結節状の増殖パターンが特徴的な腫瘍であった。結合織増生は全般に乏しかったが，浅頸リンパ節及び気管気管支リンパ節では少量の結合織が腫瘤を小結節に分画しており(写真1，AZAN)，脾十二指腸リンパ節では腫瘍細胞はむしろ乏しく水腫や結合織増生が顕著であった。腫瘤

を構成する種々な細胞の中でも多核のReed-Sternberg細胞(RS細胞)及び単核のHodgkin細胞(H細胞)が最多数を占め，背景にリンパ球，好酸球及び好酸性の粗大な顆粒を有する細胞が混在していた(写真2，HE)。RS細胞及びH細胞は豊富な好酸性の細胞質と大型の核小体を伴う明るい円形核を有していた。RS細胞は概ね2核で本腫瘍の診断に重要とされている典型的なmirror-imageがしばしば見られた(写真3a-c，HE)。RS及びH細胞はBer-H2，LeuM1及びLCA陰性で，EMA陽性であった。好酸性顆粒を含有する細胞では顆粒は，PTAHで青染し(写真4，PTAH)，トルイジブルーで異染性を欠き，IgG，IgA及びIgM陰性で，電顕的に好酸球顆粒とは異なるためglobule leucocyteと考えられた。

考察：本例は過去に報告されている犬のホジキン様リンパ種と比較して極めて多数の典型的なRS細胞が見られ，globule leucocyteの浸潤を伴っていることから，稀有症例と思われる。

診断：犬のホジキン様リンパ腫。